

<ラウンドテーブル報告2>

初年次教育における職員の役割について

—職員主体と教職協働 第3報—

【企画者】 藤本元啓(金沢工業大学)

【司会者】 藤本元啓(金沢工業大学)

【話題提供者】 御厨まり子(明星大学)

横田利久(関西国際大学)

1. はじめに

職員の大会参加目的のひとつが他大学の実例情報の収集にあることは間違いない。

今回は明星大学と関西国際大学が話題を提供し、これらをもとに参加者の所属大学における初年次学生に対する支援体制の実例紹介や課題等についての意見交換を行った。

2. 明星大学「職員が主体的に授業の内容・運営に関わる仕組みづくり(成功と失敗)」

(1) 明星教育センター設置の経緯と体制

明星大学は1964年に理工学部1学部で開学し、現在では、通学課程に7学部11学科(理工学部, 人文学部, 経済学部, 情報学部, 経営学部, 教育学部, デザイン学部), 大学院5研究科(理工, 人文, 経済, 情報, 教育)が設置されている。本学には通信教育課程(教育学部及び通信制大学院教育学研究科)が設置されている。在籍者数は通学課程8,538名, 通信課程7,255名, 合計15,793名である。

明星教育センター(以下「センター」という)は、2010年度に付属教育研究機関として設置された。建学の精神とそれに基づく明星教育を具現化し、自校教育、実践躬行による体験教育を実践するために、センターが企画立案から実施までを担当している。

開設時はセンター教職員8名でスタート

し、6年目の現在では、教職員・勤労奨学生計40名体制となっている。今回は、センターで運営を行っている全学初年次教育科目「自立と体験1」(1年生必修)を中心に、職員が主体的に授業の内容・運営に関わる仕組みづくりをどのようにすすめてきたかについて、失敗・成功の双方の事例をもとに報告した。

(2) センターの開設時の経緯

開講の2年前から学長の諮問委員会として設置された全学初年次教育運営準備委員会において、教育目標・シラバス・ポートフォリオ及び教案などが検討されてきた。同時に、運営面をサポートできる部署を設置するために明星教育センター(仮称)設置準備委員会でセンターの骨子が作られ、「自立と体験1」とあわせて大学評議会です承された。了承後、開設準備委員会において開設に向けてのセンターの設備面・運営面の整備をすすめていくこととなるが、教学内容がまず先行して準備がすすめられたため、これを追いかける形で実施にむけた運営上の体制を整えていくこととなった。双方の準備委員会は、開設年度前に解散となるが、教員と職員が委員として、教職協働ですすめ開設を迎えることができた。

(3) 明星教育センターの仕組み

センターには、運営委員会のもとに全学初年次教育に関する委員会という小委員会を設

置し、センター教員が原案を作成し、全学初年次教育に関する委員会が案件を協議するという形式をとった。

(4) 明星教育センターの教職協働

準備の段階から、教員が準備する教案・ポートフォリオの作成に職員が携わる。主に授業の中身となる内容の検討は、センター教員が中心となり検討する一方で、職員は授業を行う際の様々な状況下で、想定される課題や調整を要する事項を学内各部署に確認をとる役割を担う。この仕組みが有効に機能しているのは、センター開設時からすでに教職協働の体制が整っていた点大きい。

(5) 主体的な関わりの実例(成功・失敗)

1) 成功例として運営面でのサポートを充実させるために教職協働で取り組む企画・運営の実施し、成功している点を挙げたい。

①センター教職員全体でのミーティング

毎週1回、センター教職員全体でのミーティングを実施し、情報を共有し、意見を交換している。これにより、具体的な方策・対策を直ちに実施に移す体制が整っている。

②全クラス統一の準備資材のルール作り

「自立と体験1」では、2,000名以上の学生を1クラス約30名、合計70弱の学部学科横断型クラスに編成し、各学部から選出された専任教員が同一教案に沿って授業をすすめる。そのため、各回の協同学習・グループ学習に必要な資材や印刷物等は、センター事務室において授業前日までに準備する仕組みとルールを作った。

③スチューデント・アシスタントの活用

現在は、6年目ということもあり、上級生が全員この授業を受講していることからスチューデント・アシスタント(以下SAという)を希望する学生が多くなり、各クラスに1~2名配置している。特に受講した1年生が「SA希望」を申し出るケースが増えたこともあり、担当教員からの紹介や勤労奨学生に限らず、2013年度の秋から「公募制」も導入

して募集を行っている。昨年度に公募をかけた際、SAを希望する学生が167名、説明会を実施しSA研修を受け登録した学生136名であった。今年度は93名がSA業務を行っている。

④連続欠席者等への対応

「自立と体験1」では、クラスごとの出席状況を集計し、出席率や連続欠席者などの情報を各学部支援室および他の学生支援部署と共有している。2回連続でこの授業を欠席すると、センター教員から当該学生に電話連絡を行うことになっている。また、修学支援を必要とする学生も含まれているクラスもあるため、その支援部門と情報を共有して、早期に連携を図ることが可能となった。

2) 失敗例としては、運営面で良かれと思っただけで行ったことが、意外に①担当職員の業務の増加、②打ち合わせ不足による時間ロス、③学内周知の不徹底、④教室設定上での調整ミス等、担当職員の業務量を膨大に増やすに至ったことが挙げられる。

(6) 今後の課題

「自立と体験1」は、「自立と体験3」、「自立と体験4」にまで至る全学部対象の体系的なキャリア教育プログラムの始点として現在に至っている。

この科目をさらに充実させるには、職員としてセンター教員と授業の企画に積極的に関わりながら、違う立場で意見交換する体制を更に整備し、教職協働の役割をより明確にしていくことが重要だと考える。センター教員と職員が、得意とする分野・役割をきちんと踏まえた上で、それぞれの立場で運営面の効率を求め安定した授業運営体制を整えられるようPDCAサイクルを回すことであろう。更に役割を明確にして、センターでの教職協働を推進できる仕組みを構築していきたい。

3. 関西国際大学「学修支援室における初年次教育の取り組み」

(1) 学修支援室の設置の背景と体制

本学は1998年に兵庫県三木市に開学し、現在は教育学部、人間科学部、保健医療学部の3学部で構成されており、約1,900名の学生が在籍している。三木キャンパスと尼崎キャンパス(2009年開設)のツインキャンパス体制となっているのが特徴である。

「学習支援センター(2015年度より学修支援センターに改称)」は、高等教育のユニバーサル化の課題に備えて、開学と同時に日本初の「学習支援センター」として設立され、今年で18年目を迎える。

学修支援センターは、現在、「学修支援室」と「メディアライブラリー(図書館)」「メディアサポート室」の3部門で構成されており、三位一体となって学生の学びを支援している。

(2) 学修支援室における学修サポート

学修支援室は、「充実した学生生活を送りたい」「将来の夢のために力をつけたい」学生に対して、一人ひとりに応じた学修サポートを行っている。

具体的には、①学習相談、②センターオフィスアワー、③センタープログラム、④ステップアップ・プログラム(有料講座)、⑤自習教材の提供、⑥検定試験の実施、などの学修支援サービスを提供する窓口となっている。このほかにも、教育実習、保育実習、看護学実習等の実習支援を行っている。

(3) 学修支援室における初年次教育の取り組み

本学の初年次教育は、入学前から始まっている。具体的な内容は以下のとおりである。

1) ウォーミングアップ学習

高校から大学への接続をスムーズにするために、入学予定者に対して入学前の2~3月に「ウォーミングアップ学習」と呼ばれる入学前教育を実施している。入学前に大学の学

習や生活を体験することで、高校までとは大きく異なる学習環境の変化への対応や、同級生のみならず、教員や上級生を含めた人間関係づくりなど、大学生活への不安を軽減し、入学後にうまく適応してもらうことを目的としている。

内容としては、学修支援室をはじめとする大学の施設やサポート体制の紹介、ゼミナールの模擬体験、コミュニケーションワーク(アイスブレイク)などが主なメニューとなっており、昼食時は立食形式で在学生(ヘルパーの学生)や教職員との交流の場となっている。

後期入試合格者を除く2015年度入学生の出席率は84%で、「大学生活への不安が少なくなった」との回答が寄せられている。

近年、保護者対象のプログラムの充実を図っており、保護者の参加が年々増えている。保護者に対しても本学に関する理解を深めてもらうと同時に、大学生を持つ親としての不安を解消してもらうよい機会となっている。希望者には個人面談も実施している。

一方、大学の立場からみると、ウォーミングアップ学習は入学予定者と接する最初の機会となることから、入学後にケアが必要と思われる学生に関する情報は、新入生のアドバイザー担当の教員と共有している。

また、三木キャンパスでは、強化クラブ(硬式野球部・サッカー部・硬式テニス部)の入部予定者を対象に、ウォーミングアップ学習に先駆け、「プレウォーミングアップ学習」を実施している。これまでクラブ活動中心の生活を過ごしてきた入学予定者に、入学後はクラブのみならず、学習にも関心をもたせ、文武両道の生活を意識づけることが狙いである。2015年度強化クラブ入部予定者の出席率は76%で、受講者からは、「先輩の話から、大学の生活リズムなどがわかった」「勉強とクラブ活動の成績が比例していると聞いたので、両立できるように頑張りたい」など

の感想があがっている。

2) 基礎学力診断テスト

ウォーミングアップ学習，もしくは入学直後の「フレッシュマンウィーク」(新入生に対して行う1週間程度のオリエンテーション)期間中に，新入生に対して「基礎学力診断テスト」を実施している。これは，「日本語運用能力テスト」と「論理思考テスト」の2種類から成る。

採点・集計の結果は，入学直後に実施しているアドバイザー教員による新入生の個人面談の際の資料として役立ててもらおうとともに，低得点者には学習サポートを実施している。

2014年度は，朝日新聞の天声人語の漢字の書き取りの課題を課した。2015年度は新たに導入したeラーニング形式の基礎学力強化の教材を，まずは基礎学力診断テストの低得点者を対象に活用していく予定である。

3) 学習相談，オフィスアワー，センタープログラム

(2)で述べたとおり，学修支援室の主な業務に，「学習相談」，「センターオフィスアワー」および「センタープログラム」の運営がある。

新入生の「学習相談」の内容で最も多いのが，履修に関する相談である。4月初めの履修登録期間中，学修支援室には多くの新入生が履修登録について質問にやってくる。ここでの対応が今後の学修支援室の利用につながるため，丁寧な対応が求められる。

学生からの学習に関わる専門的な事項の質問については，「センターオフィスアワー」で対応している。本学では，原則としてすべての専任教員が，毎週1回，学修支援センター内で学生からの質問や相談に応じる体制を取っており，学修支援室は学生と教員をつなぐ役割を担っている。

また，学修支援室では，学生の多様なニーズに対応し，通常の授業では取り上げられな

い基礎的な学習や将来の進路を実現するための学習プログラムを，「センタープログラム」として企画，開講している。専任教員や学修支援室のスタッフが担当し，単位認定の対象にはならないが，受講料は無料である。

4) 欠席調査とアドバイザーによる個人面談

本学では，学生の欠席状況を把握し，欠席による資格喪失や学習意欲の減退・成績不振等に対して適切な指導を行うために，春学期と秋学期の年2回，欠席調査を実施している。

特に入学直後に欠席が目立つ学生は，大学生活に適應できず，退学に至る傾向が強いことから，早期の対応が不可欠である。欠席の多い学生については，欠席状況を保護者に通知して協力を要請するとともに，アドバイザー教員による個別面談を実施し，大学と保護者とが連携してサポートを行っている。

(4) 今後の課題

今後，学修支援室の初年次教育に関する取組として，推進していきたいのは以下のとおりである。

1) 基礎学力の強化

学生の基礎学力の強化を図るために，今年度からeラーニング教材を導入した。今後は，初年次の段階を中心に，いかに教員と連携して，本教材を全学的に活用してもらう体制を構築するかが課題である。

また，入学時の基礎学力試験の結果から，指定校推薦入試，AO入試，スポーツ特別入試など，本学では早期に実施している入試で入学した学生については，低得点者の割合が高いことが判明している。そこで，初年次教育部門や学科，入試課と連携して，早期合格者に対して，入学前から本教材を使った基礎学力の強化に取り組んでもらえるよう，進めていきたい。

2) 上級生チューターによるサポート

新入生の学習相談内容で多いのが，「レ

ポートの書き方」である。その対応策として、上級生を学修支援チューターとして養成し、1年生のレポート作成やノートの取り方の指導などに当たれるような体制づくりを、2015年度の春学期から試行的に進めている。

「学生による学生の支援」の仕組みを体系化し、定着させることが今後の課題である。

4. おわりに

参加者から報告者への質問、所属大学の実情についてのコメント等が多くあり、活発な意見交換が行われ、本テーマに関する関心の深さが窺われた。次回大会でも本ラウンドテーブルを開催することで一致したので、報告者を募りたい。参加者31名。